

月刊 水試ニュース

発行所：愛知県水産試験場（本場）

513号

平成31(2019)年4月

いわし類長期予報（平成31年4月から7月）

漁業生産研究所 海洋資源グループ

太平洋海域におけるイワシ類の長期漁海況予報(予報期間:平成31年4月から7月)が、本県を含む関係機関による検討を経て、3月26日に国立研究開発法人水産研究・教育機構から発表されました。このうち、本県および周辺海域の予報は以下のとおりとなっています。

1 海況

予測期間中の黒潮流路はA型で推移し(図1)、熊野灘～伊豆諸島北部海域の沿岸水温は、「平年並み」から「高め」で推移し、渥美外海へは黒潮の蛇行にともなう暖水波及があると予測されています。

2 シラス

渥美外海への暖水波及にともない、4月から5月は、早期の水温上昇と稚仔魚の輸送に有利な条件が重なり漁獲は高水準と推定されます。一方、6月以降は貧栄養の暖水に覆われて漁場形成に不利となり、漁獲は低水準と推定されます。漁獲量の推移は30年と同様な経過をたどる可能性が高く、期間中の漁獲量は「30年並み」と予測されています。

3 マイワシ

マイワシ太平洋系群の資源水準は中位・増加傾向となっており、漁獲の主体はこの冬春季に発生した10cm以下の0歳魚(2019年級群)で、海況的にも卵や稚仔魚の供給が期待できます。期間中の漁獲量は好調であった「30年並み」から「上回る」と予測されます。

4 カタクチイワシ

沖合を回遊するカタクチイワシの資源水準は低位・減少となっており、1歳以上の来遊は引き続き少ないと推定されます。一方、5月以降に漁獲の主体となる春生まれの0歳魚(2019年級群)は、30年と同様に近海で発生したシラスの輸送に有利な海況となっていることから、期間中の漁獲量は「30年並み」と予測されます。

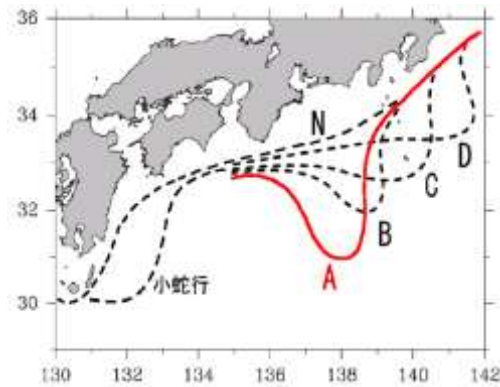


図1 H31.4.4の黒潮流路と黒潮流型の分類

水産試験場研究発表会を開催しました

本場 企画普及グループ

水産試験場では試験研究成果を発表する「水産試験場研究発表会」を毎年開催しています。平成31年度は2月28日(木)に、蒲郡市三谷町の本場で開催し参加者は漁業関係者、一般企業、県関係者など75名で、活発な意見交換が行われました。研究成果の抜粋を以下に紹介します。

○矢作川河口におけるヨシエビ稚エビの分布

本県沿岸漁業の重要な漁獲対象であるヨシエビについて、その種苗放流効果を高めるため、矢作川河口における稚エビの生態調査(図2)を実施し、稚エビの分布や移動等を検討した。

ヨシエビは体長10mm程度で矢作川に着底し、体長30mm程度に成長すると海域へと生息域を移していると考えられた。河口域に加入した多くのヨシエビは、加入初期には水深数cmのごく浅い波打ち際に密集して分布し、その後、徐々に河口域の広範囲に分布域を広めていると推測された。ヨシエビが河口域へ加入する時期は遅くとも7月下旬と考えられた。

今後も調査を継続し、ヨシエビの加入時期や河口域でのより詳細な移動・分散状況等を把握し、ヨシエビ人工種苗の最適な放流技術の向上を図っていく。

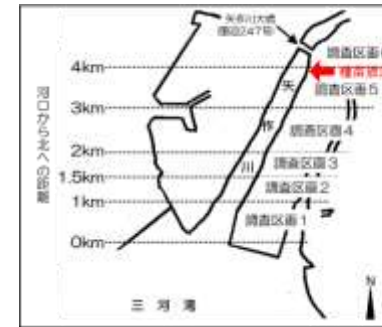


図2 矢作川における調査区域および調査風景



○ウナギ遡上行動試験

近年、ウナギの資源量は海洋環境や生息環境の変化などにより減少している。

本試験では、ダムや堰などの構造物による稚ウナギの遡上経路遮断に着目し、ウナギ(体長60~150mm)を用いて、遡上能力を明らかにすると共に、遡上に適した斜面構造について検討した(図3)。

ウナギの遡上には斜面の表面形状及び傾斜角度が大きく影響し、小型サイズ(60~90mm)のウナギの遡上は、突起物の直径が18~38mm、間隔が5~10mm、配列がZ字型のものが適していると考えられた。

なお、大型サイズ(120~150mm)は、全試験において90%以上の個体が遡上したため、本試験の条件下では小型サイズに比べ大型サイズのウナギは、遡上能力が高いことが示された。

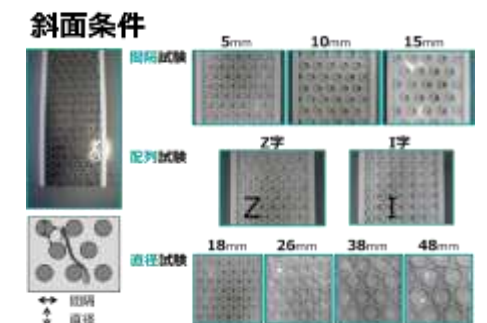
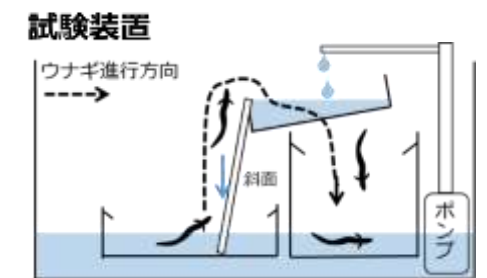


図3 試験装置と斜面の条件

